

# 相談支援つうしん

<第21号>平成28年1月15日  
湘南養護学校 支援連携部  
相談支援係 一教師編一

## ～行動の畏にはめる～

褒めたり注目を与えなかったりすることで適切な行動を増やしていくときには、行動の畏にはめることが大切であると言われます。これは、最初は好子を提示して増やした適切な行動に対して、徐々に好子を減らしていき、最終的には好子がなくても目標の行動が自然に生じるように仕組んでいくことを言います。最初にご褒美があるから嫌々やっていたことでも、続けているうちに次第にやること自体が楽しくなったり違和感がなくなったりすることに合わせて、計画的に好子を減らしていくところにその特徴があります。このプロセスを正に畏にはめるかのごとく、本人には気づかれないように徐々に、かつ巧妙に減らしていくことから、このような言い方になったのでしょう。

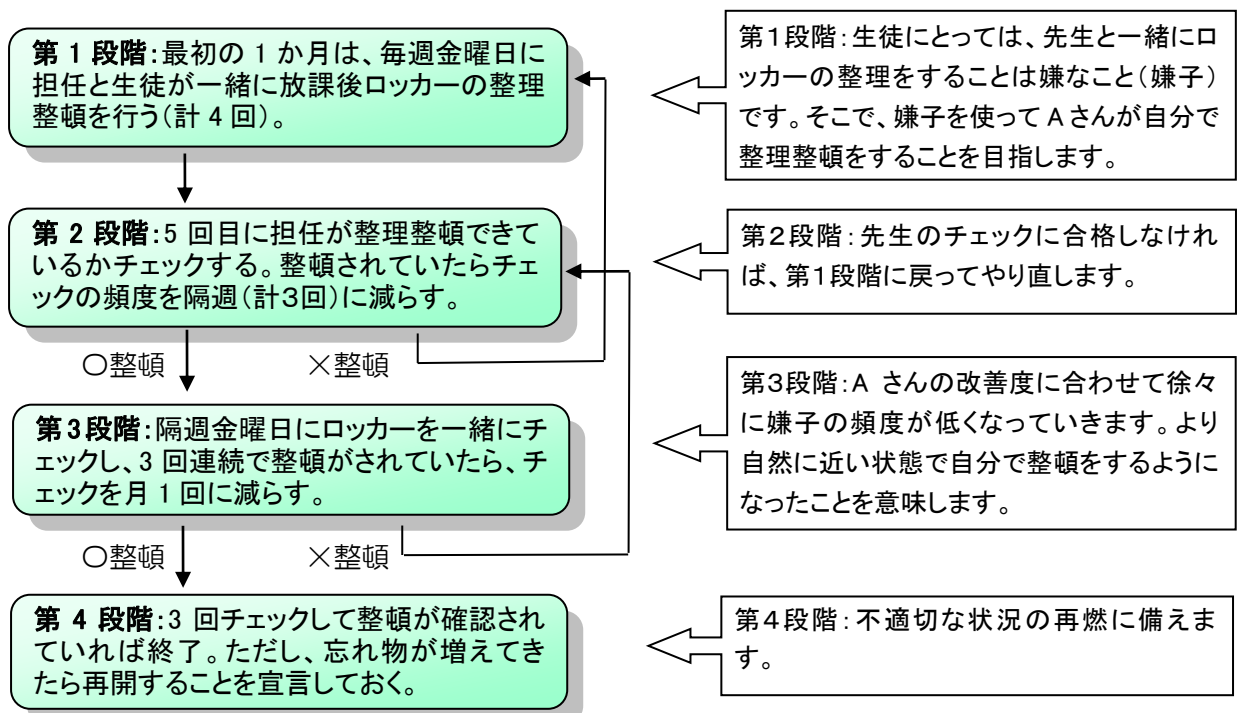
そこで、支援を行うときには次の2点をセットで考えるようにしてみてください。

★ 支援の手立てに用いる好子

★ 好子を徐々になくしていくスケジュール ⇨ 行動の畏にはめる

この考え方は、嫌子を用いた手立てにも活用することができます。ある高等学校へ訪問相談を行った事例を紹介します。Aさんは忘れ物が多く、提出物がおろそかになって成績に影響して進級が危うくなっていました。彼は、自分の力だけでは整理整頓やスケジュール管理をなかなか上手くできない所がありました。そこで、支援の手立てとしてロッカーの整理整頓と提出物の期限の確認を手伝ってほしいと担任の先生方をお願いしたところ、「それはできません。クラスには30名の生徒がいますし。ここは小・中学校ではありませんから。」と言われてしまいました。おそらく、担任はこの手立てを卒業まで毎日行わなければならないと勘違いされたのでしょう。確かに、これだけの手立てを卒業するまで毎日行うことは厳しいと思います。

そこで、次のような手立てのスケジュールを合わせて提案しました。



このスケジュールは生徒本人に事前に伝えているので罍にはめていたとは言えませんが、スケジュールの組み方の一例として紹介しました。知的に理解した方が見通しを持ちやすい生徒の場合は、スケジュールを伝えた方が意識的に行動することもできます。A さんの場合、フローチャートの通りこの手立てでは最短で 10 回程度の介入で終了となります。1 回の整理整頓にかかる時間が 15 分と考えても、先生にとって合理的配慮の範囲と判断されるのではないのでしょうか。

また、この手立てが行われているとき、生徒にはどのような変化が見られるのでしょうか。おそらく、最初は先生と一緒にロッカーを整理整頓するのは恥ずかしくて嫌なので、仕方なく整理整頓をしていたと思います。しかし、継続することによって整理整頓にも徐々に慣れ、当初に比べて楽に整頓できるようになっていき、嫌子がなくても自然な習慣として（行動の罍にはまる）整理整頓を心がけるようになっていきます。加えて、ここが最も重要なことですが、提出物が間に合ったときには先生から肯定的な評価を増やすという手立てが併用されることは言うまでもありません。第 20 号でも記載した通り、嫌子を用いた手立ては極力導入せず、用いたとしても好子を用いた強化の方が大事であることは言うまでもありません。

### ～校内の風景～

次に、好子を用いて行動の罍にはめる例を紹介します。中学部の B さんは、朝スクールバスでの態度を注意されることが目立ちました。そこで、バスの中で行儀よく座っていられたらシールがもらえ、数がたまるとご褒美と交換できるというトークンエコノミー法が実施されています。この方法は功を奏して、B さんはバスの中で行儀よく過ごせるようになり、毎朝嬉しそうに担任からシールをもらえたことを報告してくれます。

では、このトークンエコノミー法で強化された行動は、どのようにして好子なしで自然な行動となるよう行動の罍にはめていけばよいのでしょうか。

例えば、次のようなスケジュールが考えられます。

**毎日シールをあげるのではなく、試しにあげない日を設ける。そして、シールをあげない日でも適切な行動が見られるなら、徐々にシールをあげる日を減らしていく。**



新しい手立てを導入して目標となる行動が獲得されると、その手立てを撤去する時期をいつにするか戸惑うことがあるかもしれません。そのときは、ぜひこの行動の罍にはめるという考え方を思い出してください。

また、罍にはめずに突然強化を止めることを無強化と言います。そうすると、一時的には強化を求めて適切な行動は増えると考えられますが、次第に獲得された行動は消去されていきます。この現象をもって「**ご褒美がないとできないなんて呆れてしまう。**」などと判断してしまうのは誤りで、上手く行動の罍にはめることに失敗したということになります。罍という言葉のニュアンス通り、ご褒美がなくなっても行動が維持されるように巧妙に仕掛けることが専門性のなせる業（わざ）と言えます。

**最初からご褒美などなくても与えられたことをできるようになることが大切だ!**という考えもあります。しかし、発達に遅れや偏りがある子どもに対する教育を考えると、褒めたりご褒美となる活動と取り引きしたりといった手立てを効果的に導入し、できるだけ速やかに行動の罍にはめていけるような視点を持つようにしてみてください。それによって、いつまでもただ漠然と単調に子どもを褒めるだけになったり、学年が変わって急に褒めてもらえなくなって元の状態に戻ったりしてしまうことを防ぐことができます。